

明治十九年、粕壁宿、上町にあった妙楽院が焼失して寺は現在地に移転した。これより以前から粕壁宿・岩槻町・大宮宿に通じる道路建設が行なわれていたが粕壁宿で日光街道に接続する取り付け部分だけが未着工であった。

妙楽院の火事により寺が移転したのでようやく工事に着手して、明治二十一年岩槻新道が開通した。添えから間もない明治二十四年、日光街道（旧四号国道）道筋を利用して、千住馬車鉄道（粕壁最勝院前より千住茶釜橋まで）が敷設される計画が進められていた。

このとき岩槻町と粕壁町の有志によって開通して間もない岩槻新道を利用して乗合馬車営業を企て、認可を得て粕壁・大宮間の乗合馬車営業が開始された。古老の語り伝えによると、この馬車は十人位を乗せて一頭の馬で引いて走っていたという。この馬車は馭者ぎよしやが「ラツパ」を吹き鳴らして走っていたので、その「ラツパ」の音色「テト・テト」から一名「テト馬車」といわれ親しまれたという。

後に東武鉄道が開通して、粕壁駅前に居住していた越沼良助氏が挽馬による運送業を開業した。車輛・馬匹数十を備えて多勢の馬方を備やとい、粕壁駅の貨物運搬を取り扱っていた。彼は馬力による貨物運搬だけでは満足せず乗合馬車の営業を志して粕壁・宝珠花間と粕壁・松伏間及び粕壁・関宿間の乗合馬車営業路線の獲得を目指して活躍し、粕壁駅を起点としての三路線にそれぞれ乗合馬車を運行した。

大正五年二月九日に総武自動車株式会社が粕壁・大宮間に乗合自動車を開通させたので、粕壁・大宮間の乗合馬車は廃止された。

越沼良助氏は大正十年に粕壁駅構内でタクシーの営業をしていた高橋将男と合同で会社を設立して粕壁・白岡間の乗合自動車営業の認可を得て開業した。さらにこれまでの乗合馬車営業路線を乗合自動車営業に切替えるために認可申請をして、大正十一年五月三十日に粕壁・宝珠花間に乗合自動車を開通させた。粕壁・松伏間と粕壁・関宿間は県道の道幅が狭いため途中で車輛の行き違いに必要な避讓地を設定しなければ認可されなためその用地確保に苦勞していた。なかでも粕壁・関宿間は距離が長いそのためその苦勞は大変であった。

四里八丁（関宿街道）の田圃道の用地確保と避讓地設置については越沼良助は県会議員の援助を求める必要を痛感して県会議員を説得して援助を求め開通にこぎつけた。この事業を推進するためには運送業の外に、土木工事にも進出して岩槻橋架替工事を請負いその業績も挙げた。なお粕壁・松伏間の営業成績は芳しくなく廃業してしまった。

粕壁・宝珠花間と粕壁・関宿間は順調に営業されて後に東武鉄道に譲渡され現在に至っている。また粕壁・白岡間の乗合自動車は営業が振るわず昭和初期に廃業された。この区間は後に東武鉄道がバスの運行をした。利用者が少なく休業したりしていたがいまは廃止された。